

暗転。黒いスイッチが押されたと同時に暗闇に閉じ込められたふたりは、頭上で甲高く鳴り始めたサイレンを聞いた。

「だから止めようって言ったじゃないですか！」

「面白くなってきたわね、天月君」

「僕はちっとも面白くないです！」

黒いスイッチの上に現れたパネルには『警報の解除コードを入力してください』と表示されていた。その隣ではデジタル文字で分秒がカウントされ、こうして聡志が文句を言っている間にも制限時間はめくるめく減っていく。

「なにを突っ立ってるんですか、先輩！ 逃げますよ！」

聡志は神宮の腕をつかんで、地下道の奥へと走った。全力疾走で逃げるにしても、足場は濡れて滑りやすい。懐中電灯を向けると、赤茶色のベトベトした錆が照らし出された。思うように進めない。聡志がイライラしながら慎重に足場を選んで進んでいる最中、神宮は小さく尋ねた。

「天月君、警報機を放棄したままで良かったのかしら」

「僕たちは部外者なんですよ。地下道に入ると除籍って噂もあるんですから、まずは逃げないと」

「でもね……」

神宮がなにかを言いかけたその時、足元の水溜りが朱に染まった。真っ赤な照明が天井からぐるぐるサーチライトのように周囲を照らし始めたのだ。

「嫌な予感」

重いドアを開閉する音や、ふたりのものではない話し声、幾人の足音が、遠くから聞こえてきた。ふたりは顔を見合わせる。

「天月君、逃げるわよ！」

神宮は聡志の手を握った。汗でびしょびしょだ。聡志がウブなハートをときめかず暇もなく、ぐいっと力強く引き寄せる。小柄な彼女の何処にこの力があるのか疑問を投げかけたくなるほどの勢いで、レッドアラート響く地下道を爆走していった。

神宮先輩がふたたび話しかけたのは、地下道を永遠走り続けて、聡志のひ弱な足腰が悲鳴を上げた頃だった。

「天月君は、リアルは物静かでもネット上では大騒ぎの図情の学生よね」

「そうですね、僕は春日エリアの住民です」

息も絶え絶え、聡志は答えた。

「だからって僕を軟弱者扱いしないでください。いざというときは神宮先輩を守りぬきますから」

聡志は酸素不足で咳込みながら胸を張った。

「ありがとう。でも、私が言いたいのはそういうことじゃなく……」

至近距離から男の声が聞こえてきた。追っ手の気配がすぐ近くまできている。

「急ぎますよ、先輩！」

「無駄よ」神宮は諦めの込められた声で応えた。

「どうしてですか？」

「春日エリアは筑波大学の端。つまり、行き止まりなのよ」その通りだった。ふたりの進行方向には、巨大な壁が立ちふさがっていた。

地下道の途中にも分岐点や扉があったのだろう。しかし夢中で走るふたりは気が付かなかつた。筑波大学の最端の地区まで来てしまった時点で、既に追いつめられていたのかもしれない。聡志と神宮の目の前には、武装した黒い服の男四人が睨みをきかせていた。

「おまえら、ここで何をしている」

ヘルメットの男が尋ねた。四人のリーダーのようだ。

「別に。デートつすよ、キャンパスデート」

聡志はしらを切った。長銃を持った男の顔が般若のごとく捻じ曲がる。しかし神宮が、

「第四学群の真実について調べていたの」

とあっさり白状してしまったため、聡志は焦って神宮の背中をつついた。

「い、いいんですか本当のこと言っちゃって」

「あら、いざというときは私を守ってくれるんですよ」

「心持はそうですけどね、実際はこうして先輩の背中に隠れることしかできませんよ」

「なにをコソコソ話している」

ヘルメットがジロリとにらんだので、聡志は先輩の陰にひっこんだ。

「おまえ、知っている顔だな」

ボディーマーのふたり組のうちのひとりが、神宮を指さして言った。

「名は茜だったか。地下道で会うとは思ってもみなかつた」

ボディーマーのふたりは顔を見合わせて笑っている。聡志は再び神宮の背中をつついた。

「神宮先輩、知り合いですか？」

後ろからでは、神宮の表情を伺うことはできなかった。

「なに、神宮だと？ まったく、笑わせてくれるな」

ヘルメットも話に加わり、ニヤニヤしはじめた。面白いことはなにも言っていないはずなのだがなにをそんなに先輩が可笑しいのかと聡志は首を傾げた。

「貴方たちは本物の第四学群の学生なの？」

神宮は少しも脅える素振りを見せずに言った。

「俺たちこそ幻の第四学群の勇ましき戦士たちだ。地上の現代化された学群では満足できずに地下に潜った、名前の通りアンダーグラウンド学生なのだ」

ヘルメットは得意気に語ると、前へ数歩、歩み寄った。

「さて、おまえ……神宮茜。俺たちについてきてもらおうか」

「なんだと！」

聡志が神宮の背中から飛び出した。勢いで出てきたものの、どうしていいのかわからず、とりあえず格闘ゲームでみた構え方を真似してみる。その気合も虚しくボディアーマーのふたり組に簡単に蹴散らされ、あっけなく神宮は第四学群員に捕えられてしまった。

「ためえら恥を知れ！ 美人に狼藉を働いて良心が痛まないのか！」

「俺たちは社会から爪ハジキにされた層なのさ」

武装した第四学群員のひとり、銃を向けた。

「リア充、爆発しろ！」

玩具に似た長銃から鈍く光る弾丸が発射された。弾丸は猛スピードで聡志に迫り、その左胸をえぐっていく。神宮が声にならない叫びをあげ、聡志のそばに駆け寄ろうとしたが、ボディアーマーのふたり組に両腕を捕まれて動けなかった。

「抵抗は無意味だ。茜、おとなしく付いて来い」

ヘルメットの男が指示をすると、残りの第四学群員は敬礼して、神宮をがっちり拘束したまま後に従った。

「待て……神宮先輩を放すんだ！」

背後から聡志の声が聞こえてきた。驚いてふりかえると、聡志は、両足をしっかりと地面につけて立っていた。

「おまえ……春日の火曜日モヤシ野郎じゃなかったのか？」

「春日民を安くみるんじゃねえ！」

聡志は左胸のポケットから大容量モバイルバッテリーを取り出した。分厚い機械の下真ん中に、銃弾がめり込んでいる。

「コイツのおかげで僕のスマートフォンはいつでも充電はつちりだ！ さらにこのポストンバッグには、モバイル無線LANルーターが入っているからな」

おもむろにカメラを起動したスマートフォンを、第四学群員にむける聡志。反射的に敬礼ポーズをキメる四人。シャッター音。

「いま撮った写真を Twitter に拡散希望で投稿した。即ち、ためえらが神宮先輩を拉致してるところが全世界中に知れ渡ってるんだよ！ 観念しろ悪党ども！」

聡志は武装集団の前に電子機器を掲げ高らかに笑った。

だが、安心するのは早かった。

聡志の細い腕は簡単に捻じ曲げられ、あっけなくボディアーマーの男に抑え込まれてしまったのだ。

「こうなっては仕方がない。おまえも一緒に連れて行くしかあるまい」

ヘルメットが侮蔑を込めた目で聡志を見下した。

「僕と神宮先輩を何処へ連れて行く気だ？」

鉄拳が脳天を襲い、聡志は目の前が真っ白になった。